

「クリブヒストリー」 part 4（最終回）

— 図書館の過去・現在・未来 —

加藤 恭輔

2015年に連載をスタートした「クリブヒストリー」も、今回で最終回を迎えた。これまで、3年間にわたり Part 1 から Part 3 まで、中京大学図書館の歴史を溯ってきた。今回の Part 4 では、大学開学当時の図書館の様子や2015年以降の最新の図書館の動向を紹介するとともに、今後のあるべき姿を展望する。

第6章 誕生期から成長期へ（1969年～）

中京大学は昭和31（1956）に開学した。スタート時点では商学部のみだった。学生数は237人。開学に伴い図書館に相当する図書室も整備されたが、学部・大学院が増設され学生数が年々増加し、手狭になってきたことから、独立棟の建設が喫緊の課題として浮上してきた。そして、開学から13年後の昭和44（1969）年、待望の図書館が誕生した。現在の名古屋図書館の前身にあたる旧図書館本館（正式名称は中京大学附属図書館）である。学生数は開学当時の20倍にあたる5,204人となっていた。本章では、この旧本館誕生の様子から法学部棟に法学文献センターが開設されるまでの経緯を追う。

第1節 旧図書館本館の開館

旧本館は、名古屋校地の東端に建築された。大学はすでに大きく変貌

を遂げていた。商学部(商学科と経営学科の2学科)に加え、体育学部(体育学科、健康教育学科と武道学科の3学科)、文学部(国文学科、英文学科、心理学科の3学科)、法学部(法律学科の1学科)が増設され4学部9学科体制。さらに、この年には大学院も開設され、商学研究科(商学専攻)が設置された。

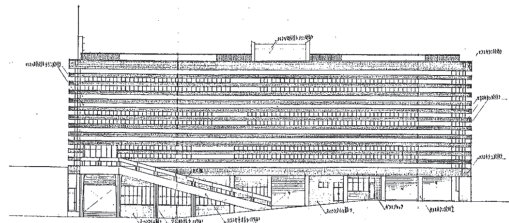
建物は4階建てだった。外観は正倉院の校倉造をイメージしたものだった。これは、当時の梅村清明理事長の並々ならぬ気持の表れと言っているだろう。奈良・東大寺にある正倉院は、東大寺の宝物殿である。同じ意味合いで、旧本館は中京大学の宝物殿的な存在だった。

建物の中心はもちろん図書館だったが、1階には学生食堂、売店(文房具と本)、床屋が置かれた。2階と3階が図書館。4階には研究所が置かれた。学生食堂は校地中央の3号館地下に1つあったが、学生数の増加で常に満員状況であったこともあり、この建物の1階にも食堂が増設されたのである。

2階にある図書館の入口(下の断面図左端)までは、建物の外側につけられた段差の低い長い階段(断面図左側下)を登って入るのだが、神殿に上がっていくようなこの階段の評判はあまり好評ではなかった。階段の段差はわずか10センチ、奥行きは1メートル近くあり、途中で踊り場があるものの30段を超えていた。なかなか歩幅が合わず、上がるのには歩幅を少し狭くして小刻みに上がらなければならなかった。



旧図書館本館



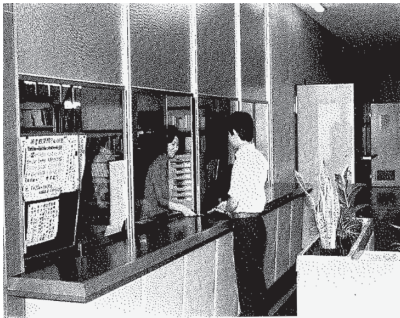
旧図書館の断面図

入口前は広い踊り場になっていて、エントランスを入ると立派な石で作られた壁画が待っていた。右側には学生用のロッカー室があり（後に新聞雑誌ブラウジングコーナーになる）、荷物を置いておくことができた。その向かいは事務室になっていて、受付カウンターがあった。受付カウンターでは、職員が入館する学生の学生証を確認して入館を許可していた。許可を受けエントランスホールを進むと3階に上がる階段があり、それを上がると閲覧室に入ることができた。

3階閲覧室には閲覧カウンターがあり、閲覧ホールには当時、カード目録の収められていたカードボックスが所狭しとばかりに置かれていた。

閲覧室は、図書を直接手に取って利用できる開架閲覧室と、自学自習を目的とした一般閲覧室の2部屋が作られた。

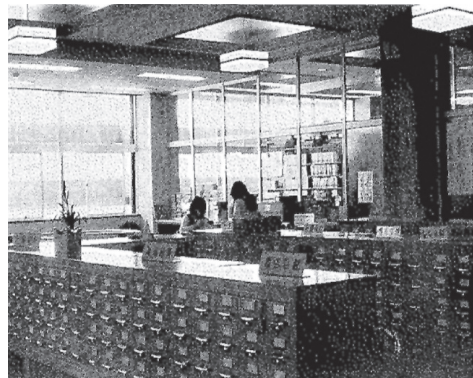
開架閲覧室は120席。広めの机が配置され、百科事典や辞書などの参考図書、それに専門図書を配架し、利用に供していた。一般閲覧室は314席。8人用の机に



受付カウンター



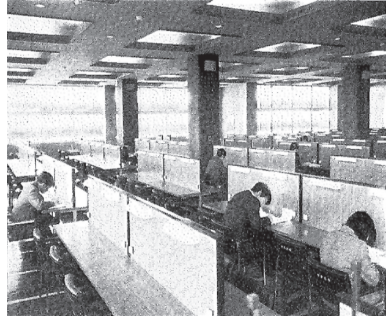
当時の受付風景



閲覧カウンター前のカードボックス



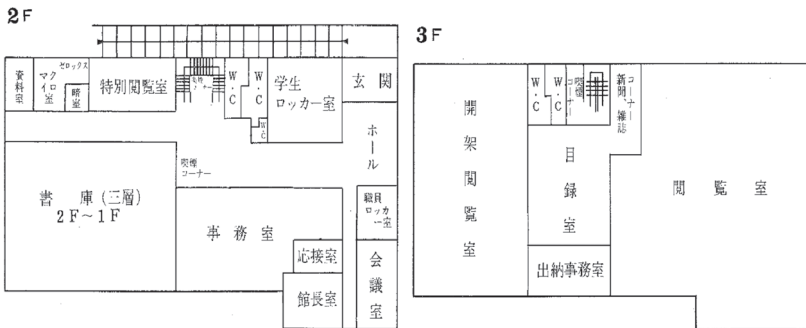
開架閲覧室



一般閲覧室

仕切を付け蛍光灯が設置された座席で、学習に集中できるよう工夫されていた（写真参照）。さらに窓側には、その窓に沿って50席ほどの机が設置されていた。当時の学生数は5,204人。その学生たちが図書館を利用するのに十分な座席が用意されていた。

当時、文部省（現在の文部科学省）から学部設置の認可を受けるには条件があった。その学部の専門図書や一般教養書の収蔵冊数が規定されており、認可を受け得る図書を購入して登録する必要があった。商学部のみでスタートしたときの図書室（約1万冊）に比べると、4学部9学科と1大学院を擁する規模になった本学の蔵書数は、約7万5千冊と7倍以上に膨れ上がっていた。旧本館の完成によって「蔵書を収蔵



しきれなくなる」という当面の危機は回避することができた。

前頁の図は当時の図書館の簡易配置図である。2階に入口、ホール、事務室、書庫、3階に閲覧室と閲覧カウンターが配置された。書庫は1階から2階に3層式の固定書庫となっていた。

第2節 旧附属図書館を支えた人々

図書の増加に伴い、図書館職員も増強しなければならない。旧本館完成当初の職員の構成は、館長1人、事務長1人、課長2人、司書資格を待った職員は男性が2人、女性が4人だった。館長を除く9人で、図書館の主たる業務である発注受入（受入業務）、登録整理装備（整理業務）、配架出納（閲覧業務）を担っていた。

図書の発注と購入した図書の受入を担う受入業務と、それらの図書を主題ごとに分類し、登録番号や請求記号を付与する整理業務。それを5人の職員で分担していた。

図書の購入は、図書委員会（4つの学部から選出された8人の図書委員と図書館長、事務長の10人で構成された委員会）で選書決定された図書を、書店に発注していた。「本を注文する」と言うと、非常に簡単な仕事に感じるが、各学部に分配された図書購入予算があり、その範囲内で計画的に図書を購入しなければならない。

受入業務は、購入した図書に「中京大学の図書である」ことを証明する蔵書印や小口印（図書の上の部分に押す印）を押印することから始まった。さらに、購入した図書の順番に番号を付し、図書登録台帳に著者名、書名、購入先、購入金額を記載する。

「中京大学図書館蔵書」と書かれた登録印にその番号を押印した図書は、整理業務を担当する職員に渡された。整理業務の職員は日本十進分類法（NDC）に従って、その図書の内容を確認して分類し、請求記号を決め、図書カードの作成をした。

整理業務の主たる仕事の図書カードの作成は、図書館業務の中でも最も重要な仕事であった。現在では、インターネットを利用してNII（学術情報センター）などのデータベースを検索し、ヒットすれば請求記号などもNDCを利用しなくても決定できる。また、図書のデータ（書名や著者名、出版社や出版年、図書の大きさやページ数など）は、本学図書館システムで決められた項目ごとに入力すれば図書データは作成され、そのデータを登録することで本学図書館データベースは作成される。利用者はパソコンやスマホなどで本学図書館ホームページにアクセスして書名や著者名で検索すれば、その図書の所在を知り利用できるようになっている。だが、当時はコンピュータなどなく、手書きで図書カードを作成していたのである。

さらに、手書きで作成した図書カードは、カードボックスに配列するのだが、これがまた大変な重労働だった。カードボックスには、請求番号順、書名順、著者名順の3種類があった。

請求番号順のボックスには、分類された番号順に一つの図書に対して図書カード1枚を配列するが、書名順や著者名順のボックスにカードを配列する作業は複雑だった。一口に「書名」と言っても、図書によってはシリーズ名があり、個々の書名がある図書、副書名や別書名のある図書、他の言語の書名のある図書など様々だ。「著者名」では、共著者名が何人もいる図書があったりした。このような場合、その異なる書名や著者名について、それぞれ別々のカードを作成していた。つまり書名や著者名カードに関しては、一冊の図書に対して2枚3枚のカードを用意して、配列しなければならなかったのである。

図書カードの大きさは、縦7センチ、横13センチ。これよりも少し大きめのカーボン紙の付いた用紙があり、それに日本語であれば手書き（後に和文タイプライター、印刷委託に変わるが）、洋書であれば英文タイプライターを使って図書カードを作成する。その後、カーボン紙を切り離して、図書カード専用の印刷機（輪転機）に装着して、無地（白紙）

の図書カードをセットして手で回転（後に電動となるが）させて必要枚数を印刷していた。

今では図書カードを作成する必要がない。カードをカードボックスに配列することもない。コンピュータを使って国立情報学研究所などのデータベースにアクセスしてデータをダウンロードすれば本学の図書館システムに必要なデータが構築される。

ずいぶん簡素化されたものである。図書館の業務の中で最も重要とされていた整理業務部分は大きく発展を遂げたといえるだろう。

それに比べて閲覧業務は、あまり大きく変化していない。当時からあった請求カードに利用したい図書の情報を記入して、閲覧カウンターに出して出納する業務は今でもある。本学図書館では自動化書庫の設置によりその出納部分は改良されてはいるが、いまだにこの出納業務は残っている。

ただ、利用者にとっては非常に便利になったことは間違いない。当時はカードボックスから読みたい図書を探し出したが、現在ではパソコンで検索することに代わった。また、本学図書館のデータだけではなく、インターネットを利用して日本中、いや世界中の図書や雑誌のデータを検索できるようになった。電子ブックや電子ジャーナルなどを利用すれば、すぐにその目次や内容をパソコンで読むことができるようになった。当時からすれば、考えられないことである。

利用者から出納依頼があれば、図書館職員はその請求カードを持って書庫の中を走り回り、できるだけ早く利用者に提供するように努力していた。涙ぐましい業務であったが、それが図書館の仕事だった。このような激務をこなす当時の図書館職員の姿が目に残ってくるようだ。

第3節 大学の成長とともに

昭和44（1969）年に旧本館が完成したものの、大学はその後も成長し続けた。完成してわずか2年後には、豊田に体育学部が移転すると

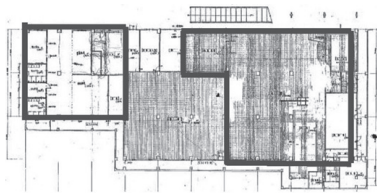
ともに豊田分館を設置した。この時、文学研究科心理学専攻と商学研究科に博士課程が設置された。その2年後には、文学研究科に国文学専攻、さらに次の年には体育学研究科体育学専攻が設置された。その後も、ほぼ1、2年おきに大学院の充実が図られ、昭和61（1986）年には豊田に2つ目の学部となる社会学部を設置した。この時、現在の豊田図書館が誕生している。

旧本館も変化した。建設当初、学生食堂や研究室を併設していたが、大学の充実発展とともに昭和58（1983）年には、取り壊した学生食堂の跡地に、2層式で当時最新だった電動集密書架26連を設置した閉架書庫を増設した。これは、大学の学部や大学院の増設に伴う図書の充実起因している。毎年約1万冊を超える図書の増加にそれまでの書架では収蔵することができなくなり、書庫の拡充が必要となったからだ。

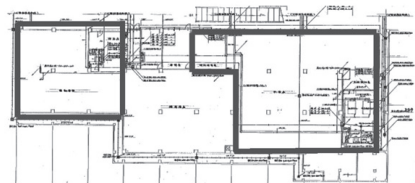
旧本館の完成当時の書庫の収蔵能力は約30万冊だったが、完成から10年を経た頃には蔵書数は約40万冊となり、収蔵能力を超えた。そのため書庫の壁面に簡易シェルビー（書架）を置いてしのぐ有様だった。「この状況が続けば書庫が利用できなくなる（まともに歩けなくなる）」。

学生食堂を廃止して、書庫へと改築した結果、図書館の収蔵能力は約80万冊と大幅に上がった。

この間、昭和51（1976）年には、法学研究科法律学専攻が、その2年後には心理学専攻と法律学専攻に博士課程が設置された。それに先立



昭和43年完成当時の1階書庫
(黒枠部分の右側は学生食堂、左側は売店と床屋)



昭和57年の改築図
(黒枠部分が電動書架を設置した新書庫部分)

つ昭和 48（1973）年には、現在の校地Ⅱの法学部棟が完成している。この時、法学部棟に図書館が建設されなかったことは後に大きな課題となる。

法学部棟には、法学部と大学院の学生が授業を受講するための教室棟と法学部教員の研究棟とが作られた。図書館は「校地Ⅰ」にある旧図書館本館を利用した。これは、法学部や大学院の学生、教員にとって非常に不便だった。緩和策として法学部棟には法学部研究センターが作られ、そこに法学部関連の雑誌と少しの図書が置かれた。

その後、昭和 60（1985）年には、法学部売店だった 13 号館 1 階に図書館の法学部分室を設置し、本館にあった法学関連の製本雑誌と参考図書を移した。大学は、昭和 62（1987）年に経済学部を増設。元号が昭和から平成に変わり、平成 2（1990）年には豊田校舎に情報科学部情報科学科と認知科学科、さらに社会学研究科を増設した。その翌年には、名古屋校舎の商学部を改組して、商学部経営学科を経営学部として独立、同時に経済学研究科を増設した。

大学の成長に並行して、図書館の蔵書は増加の一途をたどり、再び収蔵能力に限界が見えてきた。そんな時、校地Ⅱの法学部棟に法学専門の図書館を建設する話が上がり、平成 10（1998）年に現在の法学文献センター（LLC）が建設された。このことは、旧図書館本館にとっても大きな救いの手となった。法学関連図書全て（一般教養の法律書は除く）

をこの法学文献センターに移管することとなったからである。

移管資料の数は 5 万冊にのぼった。その結果、旧本館の書庫は一息つくことができた。しかしそれもつかの間のこと。旧本館では、開架閲覧



完成した法学部棟（グラウンドから）

室のスペースの狭さが浮き彫りになってきた。学部や大学院を増設したことで、学生数が名古屋校地だけでも 8,000 人を超えるようになった。当然図書館の座席数も不足する。

図書館内ではもちろん、大学全体の中でも問題を指摘されるようになった。そんな時に、大学開学 40 周年事業として立ち上がったのが、現在のセンタービルの建設であった。平成 7（1995）年のことである。建設の経緯については、クリブヒストリー第 3 章で紹介したとおりだが、センタービルにライブラリーサービスセンター（LSC）が開設されたことで、旧本館（現・名古屋図書館）と豊田図書館、法学文献センターと、現在の図書館 4 館体制の基礎が固まった。

第 7 章 中京短期大学・中京大学の誕生と図書館（1954 年～）

昭和 29（1954）年 4 月、中京大学の前身である中京短期大学が現在の名古屋キャンパスに開学し、同時に図書館もスタートした。2 年後の昭和 31（1956）年には、中京大学が誕生した。（中京短期大学の学生募集は停止）。本章では、図書館の黎明期とも呼べる開学当初から、昭和 44（1969）年に旧図書館本館（現在の名古屋図書館の前身）が開館した前後までの様子を振り返ってみる。

第 1 節 短期大学から 4 年制大学への進化の中で

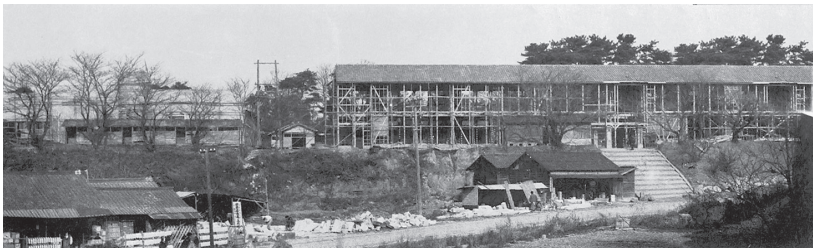
中京短期大学は八事本町の中京商業学校女子部跡にたてられた。木造 2 階建ての講義棟 1 棟と平屋建ての研究室・図書館・講堂で構成された。1 キロ離れた中京商業高校（現・中京大附属中京高校）の体育館や教室も共用していたが、その共用部分も含めて校舎面積は 2,640 平方メートル、現名古屋キャンパスの約 30 分の 1 に過ぎなかった。図書館は現在 4 号館が建っている位置にあった。学生数 75 人、教員 20 人、図書館の蔵書数はわずか 10,503 冊だった。

下の写真は短期大学開設時の校舎建設の風景とキャンパス図だ。写真の左側に数本の木が映っているが、その奥にある建物が最初の図書館である。

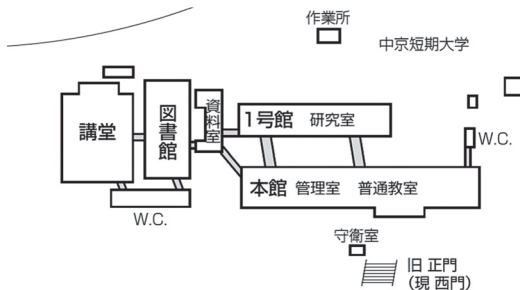
中京短期大学は商科単独だったが、2年後に発足した4年制の「中京大学」には、専門教育課程としての商学部に加えて、一般教育課程を受け持つ教養部も同時に設置された。教養部の図書閲覧室は、川名本町にあった中京商業高校内に設置された。蔵書数は八事・川名を合わせて約27万冊となっていた。

次頁の左の写真は、中京商業高校内にあった教養部の図書閲覧室である。右の写真は八事の図書館建設当初の書庫だ。木製のシェルビー（本棚）が古さを感じさせる。

創立当初、1万冊だった図書館の蔵書数は、昭和34（1959）年には3倍の約3万冊に達していた。木造平屋建ての図書館に3万冊にもの



この写真の左端が図書館（5・6本の立木の奥にある建物）昭和29（1954）年



開学時の八事キャンパス（上記写真と比較）



現在の中京高等学校にあった教養部の図書
閲覧室風景（昭和 29（1954）年ごろ）



八事キャンパスにあった図書館の書庫

ぼる図書をどのようにおいたのかは、今となっては誰もわからない。おそらく狭いスペースに、ぎっしりと置かれていたのだろう。

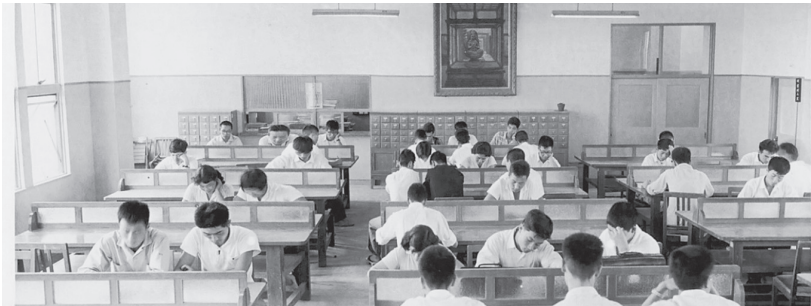
この年、中京大学は体育学部体育学科を開設し、2学部2学科体制となった。これに伴って大学本館が完成し、図書館はその4階へ移転した。3万冊の図書の重量はかなりのものと思われるが、4階まで運ばなければならず、さぞかし人手がかかったはずである。

昭和 37（1962）年には商学部に経営学科、体育学部には健康教育学科を開設、2学部4学科体制へと変わった。図書館が大学本館の4階に移転してからの蔵書数の増加は、わずか 3,000 冊に留まっていて、全蔵書数は約 33,000 冊となっていた。この数は、現在の名古屋図書館1階の全書棚の約 3分の1にあたる。次の写真は、本館4階の図書館の書庫である。

本館が建設されたのは現在の本部棟と同じ位置である。山手通りに面した場所だ。このため書庫ではあるが、とても明るい感じがする。しかし書庫が明るいということは、太陽の光で図書の表紙が焼けてしまう可能性もある。あまり薦められたものではない。当時の書庫の利用方法についての記録はないが、写真から判断すると学生が書庫に自由に入庫できたとは思えない。



大学本館 4 階の時の図書館の書庫



本館 4 階の図書館閲覧室（写真の左奥にはカウンターが見え、その奥が書庫となっていることが分かる）

上の写真は、本館 4 階の閲覧室である。写真中央と左端にカードボックスがあり、その間には受付であろうか、窓口らしきものがある。右端は出入り口。6 人掛けの机が 15 ほど置いてあり、90 人程度が座れたようだ。

昭和 38(1963)年に入ると、現 4 号館西館が完成した。昭和 40(1965)年には現 4 号館中館が完成、昭和 41(1966)年には文学部国文学科、英文学科、心理学科と法学部法律学科が開設された。この間、図書館の蔵書は飛躍的に増加した。文部省（現在の文部科学省）への学部学科設置申請には、設置学部に関する図書数を確保することが要件に含まれていた。本学も文学部と法学部を新設するにあたり、関係図書約 2 万冊

を蔵書に加え申請に臨んだ。その結果、図書館の全蔵書数は、約5万冊を超えることとなった。

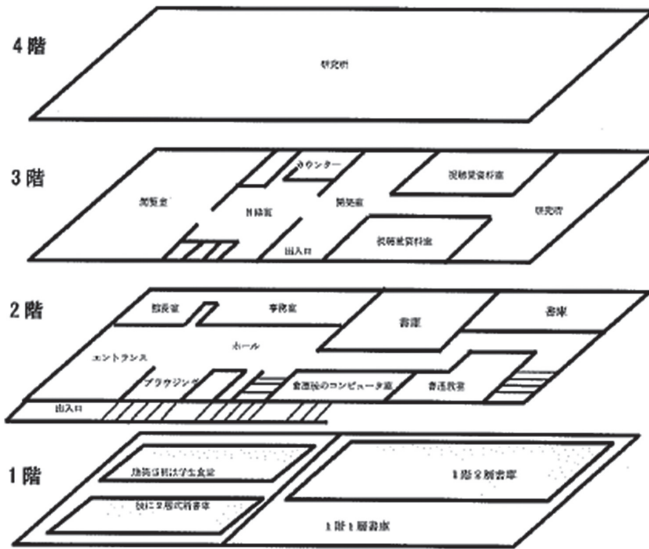
昭和42(1967)年には、現2号館が完成、体育学部に武道学科が開設された。図書館の蔵書数は年間で約5,000冊ずつ増加し、昭和43(1968)年には6万冊となった。この結果、大学本館4階では、図書の重量に耐えることができない状況が生じた。今後の大学の発展を見据え、年間に約1万冊から2万冊を超える図書資料が増加することを考慮する必要があった。大学としてさらなる進化を遂げるために、「図書館専用棟」は不可欠であり、旧図書館本館である1号館の建設が始まった。

第2節 旧図書館本館(旧1号館)の建設

昭和44(1969)年に、独立棟として当時の名古屋校舎の東の端に建設された旧図書館は、堂々たる外見だった。校倉造りのその風貌は、当時の名古屋校舎のランドマーク的な存在となった。旧図書館本館は、年間約1万冊の増加を見込んで当初は30万冊を収容できる図書館として建築された。しかし、蔵書数は予想の2倍近いペースで増え続けた。蔵書数は、昭和43(1968)年に58,489冊だったが、建築後10年間で169,935冊増加して、昭和53(1978)年には、228,424冊に達した。この間、大学は特に学部増設はしなかったが、大学院の設置が相次いだ。図書館の蔵書の増加はこれに起因する。こうした状況を受けて、旧図書館本館1階にあった学生食堂を電動集密書架が設置された2層式の新書庫に改修した。昭和58(1983)年のことである。さらに売店も書庫に改修して、最終的には50万冊まで収容できる図書館となった。今後、蔵書が増えたとしても、建築から40年間(2009年にあたる)は、この独立棟1棟で対応可能という見通しだった。



現在の2号館側から見た旧図書館本館



旧図書館本館概要図

書庫の中を写真で1階から順次、見ていこう。次の左の写真は1階1層固定書庫。固定書架の棚数は6段となっている。右は床屋と売店だった場所を改修して増設された1階電動集密書架。



1階1層の6段固定書架は両面10列で15連あった。収容冊数は1段30冊と考えると、約77万冊の計算となる。電動集密書架の収蔵可能冊数は約5万冊だった。

下の写真は1階2層固定書庫である。ここは7段固定書架が1階1層書庫と同じように並んでいたの、約82,000冊が収蔵できた。



下の写真は、1階2層固定書庫から2階固定書庫に上がる階段(一番左)と2階固定書庫(中央)。2階書庫の棚の段数は10段だった。最上段の図書を取るために階段車(中央の写真の奥に写っている)を使用しなければならなかった。収蔵冊数は約10万冊だった。



下の左の写真は3階閲覧カウンターとの行き来に使っていた螺旋階段の出入口（奥に事務室が見える）。右の写真は2階固定書庫から下の書庫を見た写真である。



下の3枚の写真は、学生食堂を改修してして増築された2層式の新書庫。旧書庫からの入り口が非常に狭く（一番左と中央）、しゃがんで入ることしかできなかった。これは構造上の問題だったらしい。中央の写真はブックトラックや台車で資料を運ぶために作られた通路。



下の写真のように新書庫に入ると広がった。2層式の書庫で、2層目には電動集密書架が設置されていた。書庫内通路も広く、ここだけで約20万冊の図書を収蔵できた。



学生食堂、床屋、売店の改修により、旧図書館本館の収蔵冊数は50

万冊となったが、改修に改修を重ねた結果、書庫の中は、まるで迷路になってしまったことも事実である。電気を消してしまえば真っ暗となり、非常灯も少なかった。

余談だが、当初の図書館の閉館時間は午後7時だった。教員と大学院生は書庫に入ることができたが、1度だけ大学院生が書庫に閉じ込められてしまったことがあった。当時は、各階各層の書庫に電気のスイッチがあり、閉館時には図書館職員が各書庫を回り、声をかけて誰もいないことを確認して電気を消していたが、書庫が広いことと大学院生の返事が小さかったことから気づかなかったのである。幸い午後10時ごろ、警備員が構内見回りの時に1階書庫の小窓から大学院生が手を出しているのを見つけ救出し、事なきを得たが、この“事件”を受けて、その後職員は書庫の各列まで見て回り、閉じ込め防止に努めるようになった。

旧図書館本館は、2013年に現在の新図書館ができるまでの44年間、利用されてきた。この間には、豊田図書館、ライブラリーサービスセンター（LSC）、法学文献センター（LLC）が移転、増設され、2013年の蔵書数は全体で100万冊に達しようとしていた。旧図書館本館だけでも60万冊を超え、収容能力に限界がきていた。

2018年現在、本学図書館全体の収蔵冊数は100万冊を超えている。今後、どのように図書館を運営していけばよいか、電子資料をどう活用していくのかなど、課題は少なくない。

第8章 課題と展望

2015年に連載をスタートした「クリブヒストリー」も、本章で最終となる。「現在」から「過去」にさかのぼる形で綴ってきたクリブヒストリーは前章、中京短期大学が開学した昭和29（1954）年にたどりついた。中京大学図書館の「源流」に到着したと言える。この壮大な物語

を締めくくるにあたって、最終章では 2015 年以降の最新の図書館の動向を紹介するとともに、今後のあるべき姿を展望する。

第 1 節 能動的学修の支援

現在の図書館の重点施策の一つは、ガラス張りの能動的学修支援施設「ラーニング・スクエア」の活性化だ。「読書や思索の場」としての図書館機能に加え、自主学習や討論、プレゼンテーションを行う「アクティブ・ラーニング（能動的学修）の場」として注目してもらうために、学生を対象にした多彩なイベントを展開している。

学生たちがレポートや論文の作成に必要な資料収集スキルを習得することは、能動的学修を進めるうえでは必須の手段である。2018 年 11 月には、論文を執筆するための文献管理ツール「エンドノート」と、自然科学や社会科学の主要な雑誌を収録した文献抄録データベース「ウェブ・オブ・サイエンス」の使い方講習会が名古屋・豊田の両図書館で開催され、卒論を控えた学生たちがパソコンを使いながら、文献検索や管理



論文執筆のための文献管理ツールの使い方を学ぶ学生たち（豊田図書館）

の方法を学んだ。

さらに、「地球の歩き方」や「ロボコンマガジン」など約 3000 タイトルの電子書籍をパソコンで読むことの出来る「丸善 イブックライブラリー講習会」や、手塚治虫マンガ電子図書館（8 か国語対応）、昭文社の発行する旅行ガイド「ことりっぷ」などの手軽に読める国内電子ブックの読み方の講習会も実施した。また、日本大百科全書や日本国語大辞典、現代用語の基礎知識など約 50 種類の辞書辞典や雑誌が検索できる国内最大級の辞書・辞典サイト「ジャパンナレッジ」の使い方講座も開催。いずれも、図書館が購入・契約している電子ブックや電子ジャーナル、総合データベースを学生にフル活用してもらい、学習や研究に役立ててもらおうのが狙いだ。

名古屋・豊田の両図書館では、本学の大学院生から「ラーニング・アドバイザー」を募ってラーニング・スクエアに配置し、学生の相談に乗ってもらっている（一斉休暇時期や試験期間等を除く）。レポートや論文の書き方、プレゼンテーション資料の作り方、ワードやエクセルの使い方など指導範囲は広いが、「英会話講座」「韓国語講座」「SPI 講座」「プ



ラーニング・アドバイザーの指導を受ける学生（名古屋図書館）

ログラミング講座」など、アドバイザーが得意とする分野の講座も積極的に実施している。

2018 年 6 月には、“島根県出身のアドバイザー” 玉木竣也さん（心理学研究科修士 2

年)が、「島根県を知ろう！」の表題で講演した。「島根県は鳥取県の右にあるか左にあるか？」といった基本的な話から、「人口減少率が激しく、日本の中で明治時代よりも人口が少ないのは島根県だけ」といった悲しい現実、出雲大社や名物・出雲そばの話題、さらには出雲弁で「ありがとう」を「だんだん」と言うことなど硬軟とりまぜた話の数々に、参加者たちは「島根県に親近感を持ちました」と好評だった。

また、2015年からは、図書館職員による「文章講座」もラーニング・スクエアやグループ学習室を利用して行われている。講座では少人数の学生がグループを作り、作文や小論文を持ち寄って批評し合い、講師が原稿を添削して文章力のアップを図っている。2018年にはラーニング・アドバイザーの大学院生が学部生の文章を添削指導する試みも初めて行われた。

従来の図書館は、静粛な環境で静かに勉強するというコンセプトのもとに運営されていたが、ラーニング・スクエアが2013年に名古屋図書館、2015年に豊田図書館に開設されたことを機に、学生間でも「能動的学修」に関心が高まっていった。ゼミナールなどで出された課題に学生たちが共同で取り組む姿は、今や図書館の日常風景となっている。無線 LAN (Wi-Fi)



受講生同士で互いの作文や小論文を読み、批評し合う
(名古屋図書館)

やパソコン、プロジェクターなどのネット環境が整備されているため、プレゼンテーションの予行演習をする光景や教員が授業でラーニング・スクエアを活用する機会も増えてき

た。

2018年11月には、司書課程担当の中川豊先生（文学部）と豊田図書館が共催で「ビブリオバトル（知的書評合戦）」を開催した。ビブリオバトルと



お気に入りの本の魅力を紹介する発表者（豊田図書館）

は、発表者（バトルー）たちがそれぞれお気に入りの本1冊を持ち寄り、その本の魅力を5分間で語るというもので、最後に投票によって最も読みたくなった本を決めるというイベントである。

今回は学生7人がお奨めの本を聴衆の学生たちの前で熱弁し、会場は盛り上がりを見せた。投票の結果、現代社会学部4年、野地一步さんが発表した山田悠介著「ニホンブンレツ」がチャンプ本に選ばれた。他の6人が発表した本は、梨木香歩著「家守綺譚」、ダグラス・アダムス著「銀河ヒッチハイク・ガイド」、三浦しをん著「月魚」、住野よる著「君の隣臓をたべたい」、ピエール・ルメートル著「監禁面接」、吉田悠軌著「一行怪談」。7冊の本は豊田図書館で展示された。

図書館では今後も、学生の図書館利用に対する興味を喚起するため、教員と連携しながら学生の学習支援を行っていく。

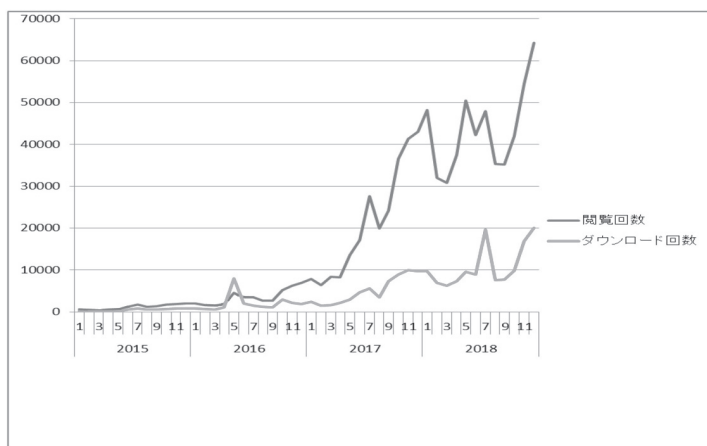
第2節 「紙媒体」中心から「電子媒体」重視へ

大学や研究機関では近年、学術研究成果を電子的に蓄積・保存し、国内外に発信する「機関リポジトリ」を構築するようになった。本学も2014年6月11日から「中京大学学術情報リポジトリ」の運用を開始し、

かつては紙媒体で出版し他関係機関へ送付していた学内の紀要や紙媒体でしか見ることの出来なかった博士論文などを掲載している。リポジトリへの論文等の登録・公開の申請受け付けは、図書館事務課が行っている。

リポジトリに掲載された学術研究成果物は、インターネットを通じて、誰もが無料で閲覧できるため、本学の学術研究成果である論文へのアクセスや引用をされる機会も増え、大学の認知度のアップ、国際的な学術交流の促進にもつながっている。

ちなみに、本学のリポジトリ利用状況は、2015年1月は閲覧回数150回、ダウンロード回数は552回だったが、2018年12月には閲覧回数が2万108回と、初めて2万台に乗り、ダウンロード回数も6万4299回と、急激な伸びを見せている（下の図参照）。



大学生になると原著論文を読む機会が増える。さらに大学院に進めば修士論文、博士論文の作成にあたって学術雑誌等から原著論文を参照することは必須事項だ。特に近年では学術研究の最新成果を知るうえで、電子ジャーナル（電子化された学術雑誌）が果たす役割がきわめて大きく、理系雑誌の多くは電子ジャーナル化している。このため、本学もシュ

プリンガー・ネイチャー社やケンブリッジ大学出版といった大手出版社と購読契約を結び、電子ジャーナル等の電子出版物を研究者や学生、大学院生に提供している（巻末の資料参照）。

一方、学術雑誌購入には以前から難題が横たわっていた。提供会社の多くは欧米の大手出版社のため、円相場の変動に伴って購入価格が大きく変動するからだ。円安の局面では購入価格が上昇し、わずか数年で30%～40%の値上がりに直面したこともある。このため、最近、他大学の中には、紙の雑誌を中止して電子ジャーナルに限定したり、大手出版社との電子ジャーナルの包括的契約を解除したりするところもあるが、本学の教育・研究学術基盤の根幹となる事柄だけに、本学図書館としても財政状況を見ながら、慎重に判断する必要がある。

電子ジャーナルだけでなく、電子書籍（e-book）の取り扱いも増えている。学認システムを使って、自宅のパソコンやスマホの画面で気軽にダウンロードして読むことができるものもあり、学生からの人気も高い。本学の電子書籍の受け入れ件数は、2010年度はわずか3件だったが、2017年度には1887件まで増え、2018年度は前年度比1.5倍の2425件と飛躍的に伸びた。さらに2019年4月からは、電子書籍化された本（主に旅行のガイドブック）をパソコンやスマホで借出できる、仮想の図書館「電子図書館」もスタートする。図書館のホームページにある「中京大学電子図書館（e-culib）」をクリックして閲覧・貸出をする。

デジタル社会の進展に伴って、ノートパソコンを図書館に持ち込んでレポートを書いたり、電子ジャーナルや電子書籍などのデジタル資料を利用したりするなど、学生たちの図書館利用方法も変化してきた。図書館では今後も電子ジャーナルやデータベース、文献管理など、学生に使いこなしてほしいソフトや学術プラットフォームに関する講習会やガイダンスを数多く開催し、電子時代における学習支援を促進していく考えだ。

第3節 学生協働

本学図書館が近年、強化している活動の一つに、「学生協働」がある。学生たちに図書館の業務の一端を担ってもらおうというもので、具体的には、学生たちが書店に出向いて、店頭にある本の中から図書館の蔵書としてふさわしい本を選ぶ「選書ツアー」や図書館イベントのサポートなどの活動がある。

選書ツアーは春学期と秋学期に各1回、実施している。ゼミや授業に必要な図書や、学習研究のために図書館に所蔵してほしい図書を、2時間という限られた時間の中で、学生たちに選んでもらう（購入費用は図書館予算）。選書した学生には優先的に2冊を貸し出し、書評（ポップ）も書いてもらう。また、選んだ本やポップを展示した「選書ツアー展」も開催している。参加した学生たちは「自分が興味を持つ分野だけでなく、他の学生が関心を持ちそうな本を選ぶ体験は有意義だ」と話す。

「学生協働」としての新たな取り組みの一つは、2018年秋学期からスタートした「図書館広報隊」の活動だ。図書館業務に関心を持つ学生



書店の店頭で図書館の蔵書となる本を選ぶ学生たち

を募って、図書館スタッフの一員としての働きをしてもらっている。初代の「広報隊」には6人の学生が参加し、企画展示をプロデュースする「展示班」とニュースレターなどの「作成班」に

分かれて活動した。

展示班のメンバーは久保田鈴菜さん、伴華奈さん、金子詩緒莉さん（いずれも文学部3年）。「雪」にちなんだ本や映画のDVDを選んで、2019年1月8日～28日まで名古屋図書館に展示した。3人は週に1回程度のペースで食堂に集まり、展示物のテーマや展示方法などをめぐって議論を重ねた。展示期間が冬になるため、「雪」をテーマとすることを決定。久保田さんらは「ライブラリーサービスセンター（LSC）に配架されている小説を片っ端からあたって『雪』にちなんだ小説を探した。選書には苦労したがとても楽しかった」と振り返る。

一方、作成班のメンバーは靱山七海さん（心理学部4年）、桑澤香波さん（心理学部3年）、杉山桃子さん（文学部2年）の3人で、ニュースレターやブックカバーを制作した。

ニュースレターのタイトルは、「1冊の本からひろがる世界」。単なるお奨め本の紹介ではなく、「理科系」を自認する学生には建築物に関する本、アウトドア派の学生のためには「世界遺産」に関する本、直観派



図書館スタッフに活動の経過を報告する図書館広報隊の学生(名古屋図書館)

の学生のためには「西洋美術」に関する本など、読者の多様なニーズに応える内容に仕立てた。また、大学図書館特有の閉架書庫の利用方法も載せた。粕山さんたちは「学年の異なった学生と意見交換しながら制作にあたることができ、とても勉強になった」と言う。

豊田図書館では春学期と秋学期に各1回、ゲーム感覚で楽しんでもらう館内イベントを実施している。イベントには「怪盗トランプからの挑戦状」、「時空図書館からの脱出」といったタイトルがつけられ、参加者はiPadの画面やQRコードなどを手掛かりに、館内に仕掛けられたクイズ形式の謎解きに挑戦し、正解を見つけ出す。日ごろ図書館になじみの薄い学生たちに少しでも親近感を持ってもらおうと、2017年度から始めたが、毎回好評だ。

このイベントの最大の特徴は、図書館スタッフが意欲のある学生に呼びかけて、一緒にゲームの制作にあたる点だ。ゲームに詳しいスタッフの指導の下、クイズの作成を現代社会学部の学生、Webページの開発

やQRコードの作成を工学研究科情報工学専攻の大学院生、iPadの動画作成を工学部の学生が担当したケースもあり、まさに「学生が主役」となってイベントを盛り上げている。



貸出用ノートパソコンの画面を見て「謎解き」を開始

「学生協働」活



書庫に仕掛けられた「謎」を解く学生たち（豊田図書館）

動には、学生の主体性やコミュニケーション能力が引き出され、キャリア形成につながっていくメリットがある。図書館では今後も、学生たちの可能性が広がるように多様な活動を展開していく考えだ。

第4節 地域との連携

本学は長期計画「NEXT 10」の中で、「社会連携—地域の交流・連携の核となる」を目標の一つに掲げ、図書館もその精神に沿う形で地域との交流を積極的に行っている。

地元の中学生の「職場体験学習」受け入れは、その具体例ともいえる。職場体験学習は中学校のキャリア教育の一環で、生徒に社会的なマナーを身に付けさせるとともに、進路選択についての考えを深めてもらう狙いがある。

本学図書館では中学校からの要請に基づき、閲覧カウンターでの本の貸し出し・返却業務や本の背表紙に配架場所を示すラベルを貼る業務などを2～3日間体験してもらっている。参加した中学生からは「利用者が手にしたい本を短時間で探せるように、1冊1冊、本の置かれる場所が決まっていて、管理がしっかりされていると思った」「利用者には喜ばれる図書館にしようと、スタッフの皆さんが努力している様子に感動

した」などと感謝の言葉が寄せられている。本学ならびに図書館への興味喚起の意味でも、今後も中学生の「職場体験学習」受け入れに積極的に協力していく方針だ。

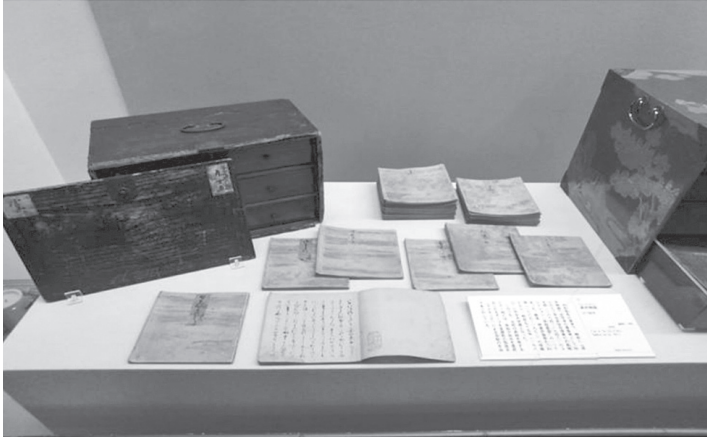


職場体験学習で本の配架作業をする中学生たち(名古屋図書館)

地域連携の具体例としては、貴重図書の「館外貸し出し」も挙げられる。本学図書館の目玉の一つは貴重本であり、中でも14世紀（鎌倉時代）の古写本『源氏物語』54巻（53帖）は屈指の善本だ。その源氏本が2018年11月3日～12月16日、名古屋市東区の徳川美術館からの依頼を受けて、同館の特別展「源氏物語の世界—王朝の恋物語」に館外貸し出しの形で出品された。

本学所蔵の『源氏物語』は河内本系^{かわちぼん}の善本で、戦前に『源氏物語』古書本の蒐集家として知られた三井合名会社理事の大島雅太郎氏（1864—1948）のコレクション「青谿書屋」^{せいけいしよおく}の一つだった。戦後、時事評論家^{おぼまとしえ}の小汀利得氏（1889—1972）の所蔵となり、昭和55年（1980）年に中京大学所蔵となった。

特別展には徳川美術館が所蔵する国宝「源氏物語絵巻」をはじめ貴重な写本類が展示されたが、本学の所蔵本も展示コーナーの一角に陳列された。桐壺^{きりつぼ}、空蟬^{うつせみ}、夕顔など31帖の表紙には、帖名を意匠したモチーフが金銀粉の型抜き（マスキング）による箔絵^{はくえ}の手法であらわされており、「源氏」の研究者や学生らが熱心にメモを取る姿が見られた。本学図書館では今後も、こうした地域貢献に前向きに取り組んでいきたいと



徳川美術館の特別展「源氏物語の世界」に出品された本学所蔵の古写本

考えている。

第5節 課題

昭和 29（1954）年に中京短期大学、2 年後の昭和 31（1956）年には 4 年制大学の中京大学が創設された。大学は 1 学部 1 学科から始まり、2019 年までの 63 年間で 11 学部 18 学科、大学院は 9 研究科 15 専攻までとなった。この間、図書館は必要資料の購入と保存を続け、わずか 1 万冊から始まった蔵書数は、今や 104 万冊を超える状況となっている。100 倍である（巻末の年表参照）。

名古屋図書館（NL）、ライブラリーサービスセンター（LSC）、法学文献センター（LLC）、豊田図書館（TL）の 4 館体制となった現在、年間の利用者は 51 万人にもものぼる。

大学の成長とともに図書館も大きく成長したが、将来を展望すれば課題も残されている。その一つは、増え続ける蔵書への対応をどうするかである。自動書庫を備えた現名古屋図書館の収蔵可能冊数は 100 万冊。

他の3館を合わせると、全体では約180万冊を保有することができる。しかしこれにも限界がある。あと数十年たてば4館の書庫はいっぱいになり、増築や改築の計画を練らなければならなくなる。時には劣化する資料や利用価値のなくなった資料を破棄する決断を迫られることにもなる。

その一方で、資料の電子化や電子資料活用の重要性は今後、一段と増していくことは確実だ。図書館はホームページの内容を充実させると同時に、電子資料の貸出やデータベースの利用をこれまで以上に推進していかなければならない。

連携の場としても活用 「巡回展示」

各館の特色を出した企画展示を、2キャンパス4館にて計画的に巡回。
学内イベント・司書課程授業・学部教員・学内他部署（環境対策課）等との連携企画も実施し、情報発信の場として定着してきた。



中部地区にとどまらず、日本の大学図書館の中で中京大学図書館が大きく飛躍するためには、何をなすべきか。最も心掛けるべきことは、「利

用者サービスの向上”であると考え。 「今の利用者が図書館に何を求めているか」に対応することが、図書館を変革する大きな鍵となる。

「多くの資料を読めるようにしてほしい」「勉強のできるスペースを確保してほしい」「友達やゼミ仲間と学習テーマなどいろいろディスカッションしたい」「プレゼンテーションの練習をしたい」「レポート作成のサポートをしてほしい」「分からないことに答えてほしい」。

図書館には学生から多様な声が寄せられる。 これまでも出来得る限りの対応をしてきたが、今後もより一層、学生の声に耳を傾け続けていきたい。

例えば、学生選書の機会を増やすことも一つの検討課題だろう。 選書ツアーの規模を拡大する、電子書籍の選書など図書館が収集すべき資料の多くを学生に選書してもらい、図書館職員と学生による選書委員会などを月1回程度開催して選書する——といった試みも面白いかもしれない。 今後の図書館を発展させていくためには、多くの学生が図書館とかわることが何より大切な事柄であることは間違いないのである。

図書館は大学の「顔」とも言われている。「良い図書館」を持つ大学は「良い大学」であると考え。 図書館の成長は大学の成長につながることを信じ、“学生とともに成長する図書館”を目指し、邁進していきたい。(終わり)

図書館が購入・契約している主な電子ブック (e-book)

<国内電子ブック>

●キャンパス外からも利用できる国内電子ブック

- ・地球の歩き方 e-book (約 200 タイトル)
- ・JapanKnowledge (小学館ランダムハウス英和大辞典・角川地名大百科事典・平凡社世界大百科事典などの各種辞書・辞典・事典から検索ができる)
- ・契約 e-book (源氏物語、著作権法、スポーツ傷害など約 3000 タイトル)
- ・ことりっぶ (昭文社の発行する旅行ガイド)
- ・週刊東洋経済 e ビジネス新書 ((東洋経済社の提供するビジネス新書。約 150 タイトル)

●キャンパス内で利用できる国内電子ブック

- ・手塚治虫マンガ電子図書館 (鉄腕アトムやブラックジャックなど、手塚治虫のマンガを日本語・英語・中国語・韓国語・イタリア語・フランス語・スペイン語・タイ語で読むことができる)。
- ・オンライン版 楠田實資料 (佐藤栄作官邸文書)、第二部 (戦後最長の佐藤栄作政権を支えた首席秘書官「楠田實」が残した未公開官邸資料。)
- ・オンライン版 大平正芳関係文書
- ・山一証券株式会社 第一期オンライン版 (第 4 集『山一証券昭和 40 年不況』データ)

<海外電子ブック>

●キャンパス内で利用できる海外電子ブック

- ・GVRL Research Matters (百科事典などのレファレンスや、学生向け多読シリーズの「時事問題」、「ニュースをにぎわす有名人伝記」、「スポーツを科学する」、「世界史探訪」、「主要疾患・障害解説」の全書籍が利用できる)。
- ・John Benjamins e-Platform db

以下の 4 点が利用できる

- ① Linguistik Aktuell/Linguistics Today
- ② Critical Theory
- ③ Discourse Approaches to Politics, Society and Culture (v.1-26,2002-2007)
- ④ Studies in Written Language and Literacy (v.1-11,1994-2002)

- ・NII-REO (人文社会科学系コレクションアーカイブ)

以下の 3 点が利用できる

- ① 18c HCPP (House of Commons Parliamentary Papers)
- ② 19c & 20c HCPP (House of Commons Parliamentary Papers)

③ [ECCO \(Eighteenth Century Collections Online\)](#)

- ・ [EEBO \(Early English Books Online\)](#)
- ・ [Oxford English Dictionary](#)
- ・ [Oxford Handbooks Online](#) (ビジネスおよび経営学、哲学・政治学・宗教学等の分野の図書を収録)

● **大手出版社のオックスフォード社が提供する電子ブックを自由に読める** (1年間の利用統計に基づいて電子ブックを購入)

[Oxford Scholarship Online \(EBA\)](#) 全分野約 13,000 タイトルの試読ができる

図書館が購入・契約している主な電子ジャーナル (EJ)

<国内電子ジャーナル>

● **キャンパス外からも利用できる国内電子ジャーナル**

- ・ [JapanKnowledge](#) (現代用語の基礎知識、イミダス、会社四季報、週刊エコノミスト)
- ・ 契約 e-book から (化学、ロボコンマガジン、週刊東洋経済『2000年から2015年』)

● **キャンパス内で利用できる国内電子ジャーナル**

- ・ [医学中央雑誌](#)
- ・ [新判例解説 Watch](#) (TKC 独自のロージャーナル)

<海外電子ジャーナル>

● **キャンパス外からも利用できる海外電子ジャーナル**

- ・ [Springer Link](#) (シュプリンガー社発行の雑誌)

● **キャンパス内で利用できる海外電子ジャーナル**

- ・ [CUP 契約雑誌](#) (ケンブリッジ大学出版発行の雑誌)
- ・ [National Geographic Virtual Library](#) (外国雑誌ナショナル・ジオグラフィックのオンライン版)
- ・ [PsycARTICLES](#) (アメリカ心理学会のジャーナルパック)
- ・ [Sage 契約雑誌](#) (セイジ社発行の雑誌)
- ・ [Science Online](#) (雑誌「サイエンス」の海外オンライン版)
- ・ [Taylor 契約雑誌](#) (テイラー社発行の雑誌)
- ・ [The Economist Historical Archive 1843-2014](#) (雑誌エコノミストのオンラインジャーナル)
- ・ [The Wall Street Journal](#) (雑誌「ウォールストリートジャーナル」の海外オンライン版)。
- ・ [Wiley 契約雑誌](#) (ワイリー社発行の雑誌)

図書館が購入・契約しているデータベース

<国内総合データベース>

●キャンパス外からも利用できる総合データベース

- ・ [CiNii Articles](#) (国立情報学研究所の提供する日本の論文データベース)
- ・ [JapanKnowledge](#) (ネットアドバンスの提供するデータベース。プログレッシブ英和中辞典・最新英語情報辞典・CAMBRIDGE 英英辞典・世界大百科事典ほか、東洋文庫・全国鉄道駅データベース・国旗国歌総覧・人物叢書なども利用可能)

●キャンパス内で利用できる総合データベース

- ・ [CiNii Books](#) (国立情報学研究所の提供する大学図書館の本データベース)
- ・ [D1-Law.com](#) (第一法規の提供する法律判例文献情報データベース。国内裁判の判例と判例に関する関連文献を集めている)
- ・ [EIC 電子情報通信学会](#) (電子情報通信学会提供の論文誌オンライン版電子情報通信学会発行の各ソサイエティの和・英論文のアブストラクトおよび全文 PDF ファイル)
- ・ [ぎょうせい 現行六法](#) (ぎょうせいの提供する現行六法の Web 版です (ID・パスワードが必要。閲覧カウンターで対応))
- ・ [iJAMP](#) (時事通信社の提供する官公庁向けニュースサイトです。省庁や自治体の動向、行財政の実務情報をリアルタイムで配信。政治・政局・経済動向なども充実)
- ・ [情報学広場・情報処理学会電子図書館](#) (情報処理学会が提供する出版物が、バックナンバーから最新号に渡って PDF で閲覧可能。ID・パスワードが必要。閲覧カウンターで対応)
- ・ [官報情報検索サービス \(タイプ B\)](#) (国立印刷局の提供する官報情報検索サービス。昭和 22 年 5 月 3 日から直近までの官報 の内容を、日付やキーワードを指定して検索・閲覧できるサービス (ID・パスワードが必要。閲覧カウンターで対応))。
- ・ [公的判例集データベース](#) (TKC の提供する公的判例 PDF データベース。最高裁裁判所、高等裁判所の民事・刑事判例を PDF で閲覧でき、行政裁判・刑事裁判・家庭裁判月報も閲覧可能)。
- ・ [TKC 法律判例データベース LEX/DB インターネット](#) (TKC の提供する法律情報データベース。公表された民事法・公法・刑事法等の全ての法律分野にわたり、判例を網羅的に収録しており、特許庁・国税不服審判所・公正取引委員会の審決や裁決の検索も可能)
- ・ [magazineplus](#) (日外アソシエーツの提供するデータベース。総合雑誌・ビジネス誌の記事情報、大学紀要などの論文情報の検索が可能)
- ・ [メディカルオンライン](#) (国内医学関連ジャーナルおよび電子書籍を基軸に

様々な医療情報が検索可能)

- ・都道府県統計書データベース (ジャパンデジタルアーカイブの提供する統計史料総合データベース。現在、本学で利用できるのは「中部」(新潟県・富山県・石川県・福井県・山梨県・長野県・岐阜県・静岡県・愛知県の9県)と「近畿」(三重県・滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県の7県))
- ・スーパー法令ウェブ (TKCの提供する法令検索データサービス)。
- ・ウエストロージャパン (国内裁判に関する法律データベース。ID・パスワードが必要。閲覧カウンターで対応)。
- ・ざっさくプラス (明治時代から現在まで刊行された雑誌記事のデータベース。皓星社の提供)。

<海外総合データベース>

●キャンパス外からも利用できる海外総合データベース

- ・EBSCOhost (エブスコの提供するデータベース)

以下の9つのデータベースは直接リンクしている。

- 1・[Academic Search Complete](#) (世界最高の貴重かつ総合的な学術的、複合全文データベース)
- 2・[Business Source Elite](#) (1,000を超えるビジネス関連出版物の全文を収録したデータベース)
- 3・[EconLit](#) (経済学に関する文献を参照できる、世界でも有数の電子データベース)。
- 4・[Ergonomics Abstracts](#) (世界中の人間工学およびヒューマン・ファクターの世界に関する広範なデータベース)
- 5・[Library/Information Sciences & Technology Abstracts](#) (560以上の専門誌や50冊近くの重要誌、厳選した約125の雑誌に加え、書籍や研究レポート、会議録などの索引データが閲覧可能)
- 6・[MEDLINE](#) (薬学・看護学・歯科学・獣医学・ヘルスケアシステム・前臨床医学などの包括的な医療情報)
- 7・[PsycINFO](#) (学術誌論文・書籍の(抜粋または全文・学位論文の抄録の収録で名高い American Psychological Association) のデータベースです)。
- 8・[Regional Business News](#) (経済、経営系新聞データベース)
- 9・[SPORTDiscus with Full Text](#) (スポーツ学&スポーツ医療分野の決定版・全文データベース)

●キャンパス内で利用できる海外総合データベース

- ・[ACM Digital Library](#) (Association for Computing Machineryの提供する電子

図書館)

・ [Chicago Manual](#) (学術論文・出版・編集・ブログ・SNSに至るまで、英文での作文スタイルの基準。英文を書く人の必携ガイドライン)

・ [Gale Databases](#) (Gale 社の提供するデータベース)

個々のデータベースを直接利用したい時は以下の 1～10 をクリック

1・ [Academic OneFile](#) (学術誌から一般誌・新聞・報告書・ビデオまで総契約 18,000 タイトル、全文掲載は 5,600 タイトル。主要な学術分派を網羅している＝研究者・学生が対象)

2・ [General OneFile](#) (大衆誌・娯楽誌・業界誌・ファッション・家庭・児童・スポーツ・旅行など幅広い分野が 14,900 タイトル以上ある。全文誌は 4,100 タイトル以上)

3・ [The Economist Historical Archive 1843-2014](#) (経済誌の元祖、創刊以来自由貿易を社としてきた世界で最も影響力のある政治経済誌の全文アーカイブ)

4・ [National Geographic Virtual Library](#) (ナショナル・ジオグラフィック協会の機関誌です。1888 年創刊以来、最先端の科学や自然の驚異を読者にわかりやすく伝えることによって、多くの一般読者を有する国際的な雑誌)

5・ [Business Insights : Global](#) (世界 193 か国、51 万社の企業と 1,000 業種の産業に関する最新データと文献を収録したビジネス系データベース)

6・ [Power Search](#) (Academic OneFile に加え、一般雑誌・業界誌などをカバーした General OneFile・Opposing Viewpoints・基本レファレンス書籍の GVRL を合わせて、検索・閲覧できるプラットフォーム)

7・ [Gale Primary Sources](#) (The Economist Historical Archive の統合検索)

8・ [GVRL Research Matters](#) (百科事典などのレファレンスや、学生向け多読シリーズの「時事問題」、「ニュースをにぎわす有名人伝記」、「スポーツを科学する」、「世界史探訪」、「主要疾患・障害解説」の全書籍が利用可能)

9・ [Opposing Viewpoints](#) (最新の注目ニュースサイト。時事・社会問題の探索・解釈をサポート)

10・ [Popular Magazine](#) (人気のある雑誌の包括的なコレクションを検索)

・ [ICPSR](#) (社会科学に関する調査の個票データを世界各国や国際組織から収集・保存し、それらを学術目的での二次分析のために提供する世界最大級のデータアーカイブ)

・ [IEEE Xplore](#) (IEEE の提供するデジタル図書館)

・ [JSTOR](#) (米国の The Andrew W. Mellon 財団により、コアな学術刊行物の電子的なアーカイブを構築し、WWW を通して大学などで利用してもらうことを目的としている)

- ・ [MIT CogNet](#) (MIT の提供する工学系データベース)
- ・ [Sociological Abstracts \(ProQuest\)](#) (社会学関係の抄録データベース)
- ・ [Science Direct](#) (エルゼビア の提供する科学・技術・医学・社会科学分野の 2,500 タイトル以上の電子ジャーナルと 6,000 タイトル以上の電子ブックを掲載する世界最大のフルテキストデータベース)
- ・ [Web of Science](#) (世界で最も権威と影響力のある高品質な学術雑誌のみを厳選して収録した Web ベースの学術文献データベース)
- ・ [West Law Next](#) (ユーザーインターフェース・検索エンジン等を大幅に刷新し、より直感的に必要な資料の調査・収集を可能にしたアメリカ法を中心とする法情報オンラインサービス)

図書館が購入・契約している新聞・記事等データベース

●キャンパス内で利用できる新聞・記事等データベース

- ・ [中日新聞・東京新聞記事データベース](#)

東海地方を代表するブロック紙「中日新聞」(1987 年～)と首都圏の地元紙として親しまれている「東京新聞」(1997 年～)の各最終版、及びほぼ全域の地方版の記事を閲覧できる。「中日新聞」が愛知・岐阜・三重など 6 県で 40 以上、「東京新聞」が東京・神奈川・埼玉など 1 都 6 県で 15 以上を収録、両紙とも地域に密着した地元記事を網羅している。

- ・ [EL-NET \(国内の新聞と雑誌 DB\)](#)

イーエルネットの提供するデータベース (国内最大級の新聞・雑誌記事データベース。ID・パスワードが必要。カウンターで対応)。

- ・ [聞蔵Ⅱビジュアル](#)

朝日新聞社の提供するデータベース。オンライン記事データベースの検索システムで以下のコンテンツが利用可能。「朝日新聞(1985 年～)」「朝日新聞縮刷版」(1879～1989 年)「週刊朝日」「AERA」の記事「知恵蔵」「人物データベース」「歴史写真アーカイブ」「アサヒグラフ (1923～1945 年)」

- ・ [ヨミダス歴史館](#)

読売新聞社の提供するデータベース。明治 7 (1874) 年の創刊号から最新号まで約 1100 万件の記事が検索・閲覧できる、日本で初めてのオンライン・データベース。

図書館が購入・契約している海外新聞・記事等データベース

●キャンパス内で利用できる新聞・記事等データベース

- ・ [Academic OneFile](#)

学術誌から一般誌・新聞・報告書・ビデオまで、総契約 18,000 タイトル、全文

掲載は 5,600 タイトル、主要な学術分派を網羅しており、研究者・学生を対象としたデータベース。

• Opposing Viewpoints

最新の注目ニュース、時事・社会問題の探索・解釈をサポート。

年表

西曆	元号	大学	図書館	蔵書数
1954	昭和29	短期大学開学(商科開学)	短期大学図書館開設	10,503
1955	昭和30			15,923
1956	昭和31	大学開学(商学部商学科開学・ 教養部)	附属図書館開設	27,846
1957	昭和32	短期大学廃止		28,887
1958	昭和33	教職課程設置		28,980
1959	昭和34	体育学部体育学科増設		29,723
1960	昭和35			30,406
1961	昭和36			30,690
1962	昭和37	商学部経営学科 体育学部健康教育学科		33,024
1963	昭和38			33,380
1964	昭和39			35,444
1965	昭和40			36,703
1966	昭和41	文学部(国文学科・英文学科・ 心理学科) 法学部法律学科		50,044
1967	昭和42	体育学部武道学科		54,171
1968	昭和43			58,489
1969	昭和44	商学研究科商学専攻修士	日本館開館	74,167
1970	昭和45			88,790
1971	昭和46	文学研究科心理学専攻修士 商学研究科商学専攻博士 体育学部豊田移転	豊田分館開設	136,080
1972	昭和47			155,108
1973	昭和48	文学研究科国文学専攻修士	法学部研究センター開設	189,168
1974	昭和49	体育学研究科体育学専攻修士	豊田分館移転	217,468
1975	昭和50			242,085
1976	昭和51	法学研究科法律学専攻修士		255,552
1977	昭和52			273,935
1978	昭和53	文学研究科心理学専攻博士 法学研究科法律学専攻博士		292,368
1979	昭和54			330,146
1980	昭和55			353,393
1981	昭和56			373,927

西暦	元号	大学	図書館	蔵書数
1982	昭和57	文学研究科国文学専攻博士・ 英文学専攻修士		392,295
1983	昭和58			409,430
1984	昭和59	文学研究科英文学専攻博士		425,321
1985	昭和60		法学部分室開設	451,831
1986	昭和61	社会学部社会学科(豊田)		481,601
1987	昭和62	経済学部経済学科 体育学研究科体育学専攻博士		501,188
1988	昭和63		豊田図書館開館	493,214
1989	昭和64/ 平成元年		図書館電算化スタート	506,941
1990	平成2年	情報科学部情報科学科・認知 科学科(豊田) 社会学研究科社会学専攻修士 (豊田)		523,364
1991	平成3年	経営学部経営学科 経済学研究科経済学専攻修士		528,825
1992	平成4年	社会学研究科社会学専攻博士 (豊田)		554,461
1993	平成5年	経済学研究科経済学専攻博士		573,974
1994	平成6年	情報科学研究科情報科学専 攻・認知科学専攻修士(豊田)		593,733
1995	平成7年	経営学研究科経営学専攻修士	ライブラリー・サービス・ センター開館	619,330
1996	平成8年	情報科学研究科情報認知科学 専攻博士	図書館ホームページ公開	640,664
1997	平成9年	経営学研究科経営学専攻博士		653,560
1998	平成10年		法学文献センター開館 図書館ホームページリ ニューアル	682,840
1999	平成11年	商学部経営学科廃止		705,569
2000	平成12年	心理学部心理学科 情報科学部メディア学科 体育学科・健康教育学科名称 変更体育科学科・健康科学科		732,805
2001	平成13年		私立大学図書館協会会長 校就任	754,853

西暦	元号	大学	図書館	蔵書数
2002	平成14年	国際英語学部国際英語学科・ 英米文化学科 心理学研究科実験応用心理学 専攻・臨床発達心理学専攻修 士・博士 情報科学研究科認知科学専攻 修士通信教育課程	私立大学図書館協会会長 校2年目	769,393
2003	平成15年	文学部言語表現学科・国文学 科名称変更日本文学科 ビジネスイノベーション研究 科ビジネスイノベーション専 攻修士		775,908
2004	平成16年	生命システム工学部身体シス テム工学科 法務研究科法務専攻専門職学位 情報科学研究科メディア科学 専攻修士		798,452
2005	平成17年	総合政策学部総合政策学科 体育学部武道学科廃止		806,547
2006	平成18年	情報理工学部情報システム工 学科・情報知能学科・情報メ ディア工学科 国際英語学研究科国政英語学 専攻・英米文化学専攻修士 情報科学研究科メディア科学 専攻博士 文学部心理学科廃止 文学研究科心理学専攻廃止		820,879
2007	平成19年	現代社会学部現代社会学科		859,666
2008	平成20年	国際教養学部国際教養学科 情報理工学部機械情報工学科 文学研究科英文学専攻廃止		877,301
2009	平成21年	経済学研究科総合政策学専攻 修士・博士 文学研究科国文学専攻名称変 更日本文学・日本語文化専攻		905,936
2010	平成22年	文学部英文学科廃止 商学研究科商学専攻廃止		946,400

西暦	元号	大学	図書館	蔵書数
2011	平成23年	スポーツ科学部スポーツ教育学科・競技スポーツ科学科・スポーツ健康科学科 文学研究科英文学専攻博士廃止 情報科学研究科認知科学専攻 修士通信教育課程廃止		969,260
2012	平成24年	商学部商学科廃止		991,750
2013	平成25年	工学部機械システム工学科・電気電子工学科・情報工学科・メディア工学科 社会学部社会学科廃止 情報科学部情報科学科・認知科学科・メディア科学科廃止 商学研究科商学専攻博士廃止 情報科学研究科認知科学専攻 修士廃止	新名古屋図書館開館	1,004,624
2014	平成26年	文学部歴史文化学科		1,018,187
2015	平成27年	国際英語学部国政英語学科を3専攻へ国際英語キャリア専攻・英語圏文化専攻・国際英語専攻 生命システム工学部身体システム工学科廃止 現代社会学部現代社会学科を4専攻へ社会学専攻・コミュニティ学専攻・社会福祉学専攻・国際文化専攻 体育学部健康科学科廃止		1,024,430
2016	平成28年	情報理工学部情報知能学科廃止		1,033,740
2017	平成29年	工学研究科機械システム工学専攻・電気電子工学専攻・情報工学専攻修士		1,040,882
2018	平成30年			
2019	平成31年		中京大学電子図書館(e-culib)スタート	